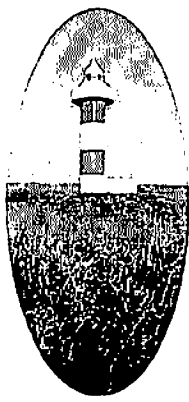


玉川教会たより

NO. 478
2月21日

教団伝道推進室の企画による北陸伝道キヤラバンに参加した竹澤牧師の、内灘教会主日礼拝に於ける説教原稿の一部抜粋要約です。

▼15節。そこで、フアリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目に「ねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」「事実上の、尋問が始まりました。フアリサイ派の人々は、先ず、事実関係を確かめようとしていきます。これは、まあ公正な態度と言えますでしょう。」



今は見えるようになった

ヨハネ9：13〜25

それだからこそ、盲人だった人は、自分の身の上で起こったことを、問われるままに、何の脚色もなく、感想もなく、そのままに淡々と話しました。この問答によって、フアリサイ派の人々の間で、所見が分かれ、事実関係そのものをどう理解するのかが、対立が生まれ

ます。16節に記されている通りです。フアリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もあれば、「どうして罪のある人間が、こんなことを行なうことができたのか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。「ここに大きな教訓が存在する」と考えま

す。私たちの信仰の証というものも、このようにあれば、充分なのではないでしょうか。私たちの力で、イエスキリストを井明するとか、相手を説得、或いは論破するなどということは考える必要がありません。ただ、自分が見聞きしたことを、そのままに語れば良いのです。神さまが私に下さったことを、そのままに語れば良いのです。どのようにして、聖書に出会ったのか、初めて教会の礼拝に出た時には、どんな風であったのか、そこがら洗礼を受けるに至るまでのこと、ただ、淡々と語れば良いのです。

▼解釈やまして解説などは無用です。事実が、そして、一人ひとりの上に働いた聖霊が、説得するので、自分の力で、まして、理屈や学問で、人を説得することなど出来ないし、その必要もありません。

現に、学問知識ならば有り余っているフアリサイ派の人々が、何の資格も経験もないこの盲人に、結果的には、論破されてしまいます。それは、この盲人の身の上で起こったことが、事実であり、彼の上に聖霊が働いたことが事実だからです。

▼17節。そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれた」ということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」「自分たちの間で、事実の認識が、そしてその理解が一致しないから、フアリサイは、盲人に、改めて尋ねます。しかも、単純に事実関係を聞いたのではなくて、「お前はあの人をどう思うのか」と、彼の感想、ないし意見を求めます。そうならば、彼だって答えないではない

られません。率直に、今度は、自分の考えを述べます。」「あの方は預言者です」「フアリサイ人が、盲人の言葉を引き出しました。事実をねじ曲げ、或いは覆い隠そうとした人々の企みは、却って、盲人の信仰告白を導き出してしまいました。」「あの方は預言者です」と言っただけでは、信仰告白とは言えないかも知れませんが、この告白こそが、20節、そして30節以下の告白に繋がって行きます。

▼18節の前半だけ読みます。「それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになった」といふことを信じなかつた。」「ここでは、イエスキリストの奇跡を認めないという立場から、…2頁…続…」

…2頁…続…

…一頁から続く。

出来事そのものを否定しに掛かるのです。これは矛盾です。出来事そのものを認めないならば、この出来事に関する告発も無用だし、今、ここで議論しなければならぬことは何も存在しないことになり

ます。
▼18節後半から、22節にかけて、なかなか、興味深いことが書いてあります。特に、21節の両親の言葉、

「本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話してください。」

両親は、議論から逃げてしまいます。自分たちが議論の中に入れられて、証言させられることを拒んでいるのです。

興味深いのは、ここで、事実関係と「いつ」と、「何」を拘っているのです。著者であるヨハネが拘っているのです。

そして、このことが、奇跡に事した男の重大な告白に結び付くことになります。

▼22節の後半は、見逃してはならない重要な記述です。

「ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言ひ表す者があれば、会堂から追放する」と決めていたのである。「ユダヤ人たちは既に」方針を持って

いたのです。つまり、この盲人の毎朝も、事の是非を糺すためでもなければ、イエスさまが有罪か無罪かを判断するためでもありません。

結論はとっくに出ていて、それに引かけるための、証拠捜しです。

それなのに、ファリサイ派は、事実を確認するという姿勢を、建前上取っています。偽善です。

▼24節は、明らかに誘導尋問です。

「さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」おかしな論理です。

「わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ」

もう知っているんです。結論は出ています。ならば聞く必要もありません。つまり、それに合わせた証言をしなくてはならないのです。

もつとはつきいと言えば、嘘を言えと迫っています。偽証を要求しています。

それなのに、表面は「神の前で正直に答えなさい」と言っているのです。一体、どっちに從つたららうのでしょうか。

しょうか。

▼男は「神の前で正直に答えなさい」と言いました。26節。

「彼は答えた。『あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということだけです。』」

今、ここで、男は、事実を事実として、そのままに、自分の身の上で起こったことを、問われるままに、何の脚色もなく、感想もなく、そのままに淡々と話したのです。

▼何の脚色もなく、そのままなのです。がしかし、重要な証言です。「目の見えなかったわたしが、今は見える」「わが、単純に、目の見える見えないうこととを、言っているのではないうこととは、明らかです。

▼「目の見えなかったわたしが、今は見える」「目の男は、イエスをまに会ひ、奇跡に与りました。

しかし、実は、イエスをまに会ったこと、そのものが、奇跡であり、恵みののです。

▼今日は省略した格好になりますが、26節以下、この男と、ファリサイ派との問

答が続きます。そして、今までと全く同じ図式で、男は、17節、23節以下、明確に信仰告白をするに至るのです。

ここでは、男は、はつきりと自分の考えを述べます。

それは、しかし、あくまでも、イエスをまの出發の基にしたものであり、自分の身の上で起こったことを、事実ありのままに述べるということに基いているのです。

▼私たちがまた、自分の信条思想を述べるのではなく、私とイエスさまとの間に起こったこと、そして、私と教会との間に起こったことを、告白しながら、感謝しながら、証し、讚美して信仰生活を送るのであります。そうすれば、自ずと、イエスさまが私たちを用いて下さるのです。

